

杜詩注釋書『心華臆斷』について

——日本禪林における杜詩解釋の様相——

太田 亨

はじめに

我が國において、杜甫が詩聖として尊崇されるのは、鎌倉末期になってからである。平安朝には評價の低かった杜詩に隆盛をもたらしたのは、五山の禪僧達である。五山禪僧の杜詩受容に關して、從來の研究は非常に概略的であるため、私は、初期（鎌倉末期から南北朝末期）、中期（南北朝末期から應仁の亂）、後期（應仁の亂から室町末期）の三つの時期に區切り、各時期における杜詩受容について、様々な角度から調査を進めている。杜詩受容の様相は、時期を追う毎に變化し、それは禪僧の残した詩文集や、杜詩研究の成果を示す「抄物」に表れている。本稿では「抄物」、中でも南北朝末期頃に抄された禪林初の杜詩抄物『心華臆斷』について、検討を進める。

一、禪林における杜詩の抄物の概要

「抄物」とは、五山の禪僧を始めとして、博士家の學者などが作成した、漢籍や佛典、また一部の國書に對する注釋を言う。禪林における杜詩への最初の注釋は、初期の虎關師鍊（二二七八〜一三四六）が、『濟北集』卷十一「詩話」に收めた「岳陽樓に登る」「已上人の茅齋」

「贊上人に別る」「變府詠懷」の四首に施した詩話であり、その注釋内容は今尙お傾聴に値すると思われる。次いで南北朝末期頃、心華元棟（生没年不詳）が『心華臆斷』を撰し、日本禪林初の纏まった杜詩抄物が完成する。以後、嘉吉年間（一四四一〜一四四三）には江西龍派（一三七五〜一四四六）が『杜詩續翠抄』全二十卷（以下『續翠抄』と略稱）を、應仁の亂前後には仁甫聖壽（生没年不詳）が『續臆斷』を、室町末期には雪嶺永瑾（一四四七〜一五三七）が『杜詩抄』全二十五卷を抄している。これらの注釋や抄物の中で現存するのは『濟北集』、『續翠抄』（卷十八の一部、卷二十缺）、景徐周麟が『續臆斷』（本文缺）に付した「序」と、更に『杜詩抄』（卷三の一部、卷十七缺）である。杜詩抄物の先驅となった『心華臆斷』は、現在散佚し、後代の「續臆斷序」等の文獻から、その存在を斷片的に知るのみである。本稿では『心華臆斷』の未だ不明の點をできる限り明確にしたい。

二、從來の研究成果

『心華臆斷』の作者心華元棟は美濃國の出身であり、十三歳で上京、建仁寺定慧院において碩石曇生に參じて隨侍し、後に碩石より法を嗣いでいる。義堂周信（一三二五〜一三八八）は心華のことを「五百僧

中一白眉」(五百僧中の一白眉)として、その才が傑出していることを認め、太白眞玄(？一四一五)は「定惠心華上人、乃獨歩之才也。故天下桃李之士、悉競遊其門焉。」(定惠の心華上人は、乃ち獨歩の才なり。故に天下桃李の士は、悉く競ひて其の門に遊ぶ。)として、多くの禪僧が彼の學藝を慕って集まったことを述べている。心華は特に學藝の方面において、高い評價を得ている。義堂や夢巖祖應に従學し、義堂に『日用清規』の講義を、夢巖に『蒲室集』の講義を受けている。また自身も杜詩・柳文・『蒲室集』・『大惠書』等を講義し、その類い希なる學識を惜しみなく披露している。義堂は杜詩の講義を幾度か行い、夢巖も周圍の禪僧と盛んに杜詩研究を行っていたことから、心華がそれらの學を繼承して、杜詩に精通していたことは想像に難くない。

心華元棟が残した杜詩抄物『心華臆斷』について、天隱龍澤(一四二二〜一五〇〇)は『默雲稿』の中で「獨心華臆斷與劉氏評點、盛行于世。」(獨り心華臆斷と劉氏評點とのみ、世に盛行す。)として、後期禪林では『心華臆斷』と、『劉氏評點』つまり『集千家註批點杜工部詩集』(以下『批點本』と略稱)が盛行していたことを指摘する。そしてその『心華臆斷』について、景徐周麟は『續臆斷』に付した序に、「非唯續乎前臆斷之僅絶于第五、而能益於學者之大焉。」(唯だに前『臆斷』の僅か第五に絶ゆるに續くのみ非ず、而も能く學者に益すること大なり。)と評し、『續臆斷』は、單に五卷で終わった『心華臆斷』の續編ではないと指摘する。そしてこのことは、『心華臆斷』は五卷まで存在し、未完であったことを意味するであろう。

以上のごとく、心華元棟は義堂の下に従學し、學識が豊かであったこと、更に『心華臆斷』が未完のまま五卷で終わったこと、禪林に流

布していたことが明らかにされている。しかし、從來の研究では、『心華臆斷』の記事を多く含む『續翠抄』や『杜詩抄』を視野に入れていない。この二書における『心華臆斷』の成立過程・内容・評價等に関する記事を精査することで、不分明な部分が少しく解明されると考えらる。

三、心華元棟と江西龍派

『杜詩續翠抄』の名は、江西龍派が住した建仁寺靈泉院内の「續翠軒」に由来しており、江西の講義を文叔眞要が記したものである。嘉吉年間頃(一四四一〜一四四三)に抄されたと言われ、中國の諸注釋書や、『心華臆斷』を始めとする日本禪僧の解釋を頻繁に引用している。それは室町時代末期、雪嶺永瑾の講義を林宗二が記したと言われる『杜詩抄』においても同様である。以下、二書に掲載されている心華元棟及び『心華臆斷』に関する記事について検討する。引用に際しては、句讀點を私に施す他は、原文通りとした。

心華が義堂に従學したことは知られているが、『續翠抄』の中には、夢巖祖應や汝霖妙佐(生没年不詳)にも杜詩の解釋について尋ねていたことが記されている。また「次晚洲」(『續翠抄』卷十九)には次の記述がある。

勝定ハ渭清遠季潭二傳也。心華ハ尊西堂二傳也。大年ハ千家二傳也。

勝定は渭清遠・季潭に傳へらるるなり。心華は尊西堂に傳へらるるなり。大年は千家に傳へらるるなり。

この杜詩繼承の記録によると、絶海中津(一三三六〜一四〇四)は清遠懷涓(一三一七〜一三七五)と季潭宗洵(一三一八〜一三九一)より

傳えられ、心華元棟は尊西堂より傳えられ、大年祥登（？）一四〇八）は『集千家註分類杜工部詩』（以下「分類本」と略稱）によって學んだとある。尊西堂の傳記は未詳であるが、清遠や季潭と共に杜詩に精通した禪僧であろう。このように『續翠抄』には、詩句の註解とは一見無縁の記事も多い。このため心華が夢巖・汝霖・尊西堂に從學した様子も明らかになるのであるが、江西龍派はなぜ心華の從學の子細を知っているのだろうか。

江西龍派は、「贈祕書監江夏李公邕」（『續翠抄』卷十三）の中で、若年時に、心華が九州から上京することを聞き、相見のために出かけたことを語っている。ただし、江西が直接に心華の講義を受けた記事は見られない。

江西は「投贈哥舒開府二十韻」（『續翠抄』卷二）に次のように言う。

伊大陽者、心華之同宿。豨是以就大陽於江州舍、親聞其講。

伊大陽は、心華の同宿なり。豨は是を以て大陽に江州の舍に就き、親しく其の講を聞く。

また「秋日夔府詠懷」（『續翠抄』卷十四）でも次のように言う。

伊大陽物語セラレシハ、心華ハ此詩ヲ一日讀マルト。伊大陽者爲心華同宿、續翠亦聽其講杜云爾。

伊大陽物語せられしは、心華は此の詩を一日讀まると。伊大陽は心華の同宿爲りて、續翠も亦其の杜を講ずるを聽くと爾云ふ。

「豨」「續翠」は江西龍派のことである。江西は心華元棟と同宿で親しかった大陽□伊の下に參じ、近江の學舎において直接に講義を受けている。心華が、一日「秋日夔府詠懷」を講讀したことも大陽から聞いている。他にも「八哀詩」（『續翠抄』卷十三）では、大陽の講義に際し、江西は眠氣のあまりに、何も覚えていないといった記事まで載せ

杜詩注釋書『心華臆斷』について

ている。このように江西龍派の杜詩學は、大陽□伊から影響を受けたことが分かる。

大陽は杜詩を講義する際、『心華臆斷』を参考にしようである。「投贈哥舒開府二十韻」（『續翠抄』卷二）の「君王自神武」（君王自ら神武）句に次のように言う。

心華臆斷引孫權非也。伊大陽亦不喜引之。此批若作不用故事、做ト意甚妙ト義上、可乎。江西云爾。

『心華臆斷』に孫權を引くは非なり。伊大陽も亦之を引くを喜ばず。此れ「批」に若し故事を用ひずして、意を做すこと甚だ妙なりと云ふ義を作せば、可なるか。江西爾云ふ。

『心華臆斷』が、ここで孫權の故事を引用するのは誤りであり、大陽も同故事を引くことを喜ばなかったと江西は指摘している。このことは、大陽が講義の中で『心華臆斷』を参照していたことを物語っている。江西は大陽から同宿の心華と『心華臆斷』に關連する事柄を聞き知ったのであろう。

大陽□伊については嗣法關係、從學關係などが不明であるが、心華元棟と同宿であり、杜詩に精通し、江西に杜詩を教授しており、禪林中期の杜詩受容において重要な存在であったことが分かる。また後述するが、この大陽□伊こそ、『心華臆斷』の成立に深く關わっている人物なのである。

四、『心華臆斷』の成立について

では『心華臆斷』はどのような抄物であったのだろうか。禪林内で流布していたため、『續翠抄』『杜詩抄』には、その註解が頻繁に引用されている。『續翠抄』では、確認できる所で、合計二百六詩が、全

十九卷各卷に引用され、更に『杜詩抄』に至っては、合計四百詩近くが引用されている。この結果を見ると、未完であった『心華臆斷』五卷の中から、大略四百詩の註解が抜粋されているのは、多きに過ぎると思われる。また『續翠抄』の卷六以降にも引用されている點は、「五卷」とする見解と食い違っているように見える。

『心華臆斷』は杜詩の幾首に注を施したのであるうか。「奉和賈至舍人早朝大明宮」(『續翠抄』卷四)に次のようにある。

心華臆斷第五卷マテアリ。故自第六往々嘗講之。

『心華臆斷』は第五卷まであり。故に第六より往々にして嘗て之を講ず。

また「送率府程録還郷」(『續翠抄』卷四)にも次のようにある。

江西云、心華臆斷五卷マテ懇ナリ。故六卷以後講之好矣。

江西云ふ、『心華臆斷』は五卷まで懇なり。故に六卷以後之を講ずるは好し、と。

この二例によると、『心華臆斷』は五卷まで存在し、丁寧で詳しいが、実際には六卷以降も心華元棟の講義は行われたようである。つまり心華の六卷以降の解釋が、何らかの形で傳承されていたのではないかと推測される。

六卷以降の實態を示す資料として、次の「遣興五首其一」(『續翠抄』卷四)がある。

然トモ今世ニ所行之心華一ニハ、此二聯、皆以此對、彼之論不見。疑是別有之乎。

然れども今世に行はるる所の『心華一』には、此の二聯、皆此の對を以てするも、彼の論は見えず。疑ふらくは是れ別に之有るか。

江西龍派の講義を記した文叔眞要は、世に廣まっている『心華臆斷』

には、「遣興」詩の二聯の對句構造についてのみ説明され、江西が述べた『心華臆斷』の論解が載っていないと困惑している。文叔は考えた末に、恐らく江西の指摘した『心華臆斷』の注は、別にあるのだらうと推測している。「酬孟雲卿」(『續翠抄』卷四)にも次のようにある。

心華臆斷非也。今相逢又相別也。後得再會、不必有如水流也。故云難衰也。至此心華別本臆斷說歟。

『心華臆斷』は非なり。今相逢ひて又相別るるなり。後に再會するを得るは、必ずしも水流の如きこと有らざるなり。故に衰衰たり難しと云ふなり。此に至りては心華の別本『臆斷』の説なるか。

江西は『心華臆斷』を否定した後、その註解、すなわち「今相逢く難衰也」を擧げるも、書き記す文叔は、その註の所在が判明せず、別本、つまり控えの書にあるのではないかと推測している。『心華臆斷』は、世に廣まっている『心華臆斷』と、控えとも言える別本『心華臆斷』が存在したようである。

この流布本『心華臆斷』と別本『心華臆斷』とは、どのような關係にあるのであろうか。「奉贈李八丈判官」(『杜詩抄』卷二十)には次のようにある。

心華臆一、首五卷整出也。然奧マテ見ハ鹿ナレトモ好科段ヲハ、與趙異也。

『心華臆一』は、首の五卷整ひ出だすなり。然れども奧まで見れば鹿なれども科段をば好くし、趙と異なるなり。

『心華臆斷』は、五卷まで整理され、世に流布したが、その他の詩に關しても粗雑ではあるが、廣範圍にわたって、趙次公とは異なる段分けが、整然と爲されていたようである。つまり、五卷まで整理された書が流布本、その他の多量の詩について、段分け等の註が施されてい

た書が別本なのである。

しかし、注目すべきことは、江西龍派は別本を熟知しているのに對し、その講義を記した文叔眞要は別本を見ていないと言ふ點である。これは『心華臆斷』の成立と深く關わっており、「授贈哥舒開府二十韻」(續翠抄)卷二に次のように言ふ。

然而心華臆斷有三々度改作焉。其第一番即語甚簡。第二番法具、裏書之。唯伊大陽傳之、世不知此、乃可見也。第三番今世間充滿者、整書是也。

然り而して『心華臆斷』三々度の改作有り。其の第一番は即ち語甚だ簡なり。第二番は法具の裏に之を書す。唯だ伊大陽のみ之を傳へ、世此を知らざること、乃ち見るべきなり。第三番は今の世間に充滿する者にして、整書は是なり。

『心華臆斷』は何度か書き直され、第一段階では大變簡單な註解であつたようである。第二段階では、法具、恐らく「反故」に通じ、一度用いて不要になつた紙のことであるが、それらの裏に註解が書き付けられていた。その反故は大陽□伊にのみ傳えられ、一般にはその存在が知られなかつた。そして第三段階で更に書き直された註解が、流布している整書『心華臆斷』であると言ふのである。つまり第一段階の『心華臆斷』は、簡單な注が施されたものであり、第二段階の『心華臆斷』が別本、第三段階の『心華臆斷』が流布本と言ふことになる。第一段階の『心華臆斷』は、後に傳えられたかどうか不明であるが、別本『心華臆斷』は、前述した心華の同宿である大陽にのみ傳えられている。これより江西は、大陽から杜詩の講義を受ける際、反故に記された別本『心華臆斷』の説を聞き、更に直接に披見したと思われる。そして、後期に成立した『杜詩抄』には、『續翠抄』以上に別本

杜詩注釋書『心華臆斷』について

が引用されていることから、別本は江西に傳わり、更に後期に繼承されたようである。この別本には、流布本の註解箇所も含め、その他の詩にも廣範圍にわたつて註解が施されていたようである。流布本『心華臆斷』五卷の中には、第二段階の別本の註解を、不必要としてか、載せない箇所も存在したため、江西が別本に觸れても、書き記す文叔の方は、別本の註を確認出来ないことがあつたようである。

從來の研究で言ふ未完の五卷で、禪林に流布していた『心華臆斷』とは、第三段階の整書『心華臆斷』のようである。が、實際には、數多くの詩が、反故に註解を施され、ごく一部の禪僧しか見ることに出来ない第二段階の『心華臆斷』が存在し、それは心華から大陽へ、大陽から江西へと傳承されたようである。『心華臆斷』は、このように複雑な成立過程を経、少なくとも第一段階の簡單な註解、第二段階の別本、第三段階の流布本が存在し、更に心華の講義を受けた禪僧が残した聞書きも存在した可能性があるため、流布の程度は差があるが、禪林に幾種類もの『心華臆斷』が存在しても不自然ではない。これらを踏まえると、『杜詩抄』に四百詩近くの註が引用された點にも納得がいくのである。

別本の存在は、『續翠抄』卷五以降の各巻にも『心華臆斷』が引用されることを説明可能とする。しかし、『續翠抄』卷一「贈衛八處士」詩に、「心華臆斷注畢矣。」(『心華臆斷』の注畢る。)とあり、この詩が『續翠抄』では卷一に配されながら、『心華臆斷』では最後の詩であつたことが窺える。また「奉和賈至舍人」詩は『續翠抄』卷四に存在するのに、『心華臆斷』について「第六より往々にして嘗て之を講ず」とあり、この詩が別本の卷六以降に存在したことを思わせる。「遣興五首其一」詩の場合、「奉和賈至舍人」詩と同じく、『續翠抄』卷四

に存在しながら、「世に行はるる所の『心華臆斷』には」とあり、その詩が流布本に存在し、卷五までに配置されていたことを想像させる。つまり同じ『續翠抄』卷四に位置しながら、『心華臆斷』では異なる巻に配されていたようであり、『續翠抄』の據った『批點本』とは、詩の配列を異にしていることを示唆する。

では心華元棟は、『續翠抄』が『批點本』をテキストに用いたのに対して、どの注釋書をテキストに用いていたのであろうか。この點に示唆を與える記述として、『杜詩抄』卷十二「承聞故房相公靈樞自閩州啓殯歸葬東都有作二首」の詩句「孔明多故事、安石竟崇班。」（孔明故事多し、安石竟に崇班なり。）に次のようにある。

孔明以下二句、臆斷云、千家草堂批點之注、未必御云、孔明相老主、以有功蜀。房公相明皇、以有功蜀、蜀人也。（略）

孔明以下の二句、『臆斷』に云ふ、『千家』『草堂』『批點』の注に、未だ必ずしも御せずと云ふ、孔明は老主に相として、以て蜀に功有り。房公は明皇に相として、以て蜀に勞有る人なり。（略）

これにより、『心華臆斷』は、『千家』『草堂』『批點』、つまり『集千家註分類杜工部詩』『草堂詩箋』『集千家註批點杜工部詩集』を参照していることが判明する。そこで、三書の内の何れをテキストとして用いたのか、前述の「贈衛八處士」詩の配置、流布本と別本における詩の配置を三書と照合してみたが、資料不足もあり、うまく合致する結果は得られなかった。結局の所、心華が用いたテキストについては不明と言わざるを得ない。

しかし、『分類本』『草堂本』『批點本』の注釋書は『續翠抄』が使用した書として注目されてきたが、既にその基礎は『心華臆斷』によって築かれていたことになる。心華は三書を参照しながらも、『續

翠抄』とは異なる配列を用いたことが分かる。

五、注釋方法の特徴

(1) 段を分けて註解

心華元棟は杜詩にどのように註解を施したのであろうか。『續翠抄』と『杜詩抄』が、『心華臆斷』の何如なる特徴に着眼して引用し、それらを何如に評價したかを検討する。

『續翠抄』と『杜詩抄』は、共に『心華臆斷』の段分けを重要視している。「重經昭陵」(『續翠抄』卷一)に、「凡三段、與心華同。」(凡そ三段なるは、『心華』と同じ。)とあるのを始め、頻繁に『心華臆斷』の段分けを参考に行っている。代表として「北征」(『續翠抄』卷三)を取り上げる。

本此詩之段、分三段、非也。分五段是也。其中亦有小段矣。此詩分段八本、于心華也。說者創心華、存大年、義者、往々有之云々。凡分段過段回照贊歎、此四段アルニ、分段過段、分篇中、始末皆有焉。長者不可無過句。況四六乎。回照ハ此詩第四段也。一篇大意也。贊嘆、詩ノ五段也。贊美肅宗玄宗陳元禮也。

本此の詩の段を三段に分くるは非なり。五段に分くるは是なり。其の中にも亦小段有り。此の詩の分段は心華に本づくなり。説く者は『心華』を創り、大年の義を存する者、往々之有りて云々。凡そ分段・過段・回照・贊歎、此の四段あるに、分段・過段は分篇の中に於て、始末に皆有り。長き者には過句無かるべからず。況んや四六をや。回照は此の詩の第四段なり。一篇の大意なり。贊嘆は詩の五段なり。肅宗・玄宗・陳元禮を贊美するなり。

「北征」詩は、五段に分けるのが正しく、その中にも小段があることを指摘し、その段分けは『心華臆斷』に基づいていけるとする。段分けには大概、分段・過段・回照・贊歎と、四種の特徴ある段が存在する。分段と過段は、一首の始末にあり、特に長い詩では過段は必ず存在すると言う。また回照は第四段であり、一篇の概要を言い、贊嘆は第五段であり、肅宗と玄宗と陳元禮を贊美すると解説する。

この分段・過段・回照・贊歎の四種の段は、何を意味するのだろうか。『杜詩抄』卷三の「北征」では心華の解説を引用する。

斤云、五言長篇古詩、有分段過段回照段贊段之法。分段者一段之事也。過段者結前生後也。回照、前二ハ凡言其體、而後トツテ回テ細述之也。贊段者祝シテ結之也。此篇具ニ有四法、全篇五節ニ分ツ段也。

斤云ふ、五言長篇古詩は、分段・過段・回照段・贊段の法有り。分段は一段の事なり。過段は前を結びて後を生ずるなり。回照は、前には凡そ其の體を言ひ、而る後にとつて回して細かに之を述ぶるなり。贊段は祝して之を結ぶなり。此の篇、具に四法有り、全篇五節に段を分くるなり、と。

「斤」とは『心華臆斷』のことである。「北征」本文を擧げるのは割愛するが、心華が段を分けた各段の詩句數、段の内容を示し、その上で解説する四種の段の特徴に當てはめてみる。第一段目は、始めの十七句を指し、朝廷に暇を請い、行在所を去り鄜州の家族の許へ歸ろうとする場面である。これが「分段」に相當する。第二段目は、續く四十句を指し、鄜州に歸る途中の艱難と當時の亂を述べ、第三段目は、續く三十四句を指し、家に歸り、家族や周りの應對を詠う場面である。以上の第二段と第三段を併せた七十四句が「過段」に相當し、第一段

を結んで第四段を生ずる役割を果たしている。第四段目は、續く二十八句を指し、官軍が兩京を回復させ、敵を一掃することを願う場面である。この第四段が「回照」に相當し、その役割は、大凡の話の筋を纏めた上で、とつて返してそのことを細かに言うことである。第五段目は、最後まで第二十一句を指し、亂の始めを追述し、唐朝の中興を心より祈る場面である。この第五段が「贊段」に相當し、分段・過段・回照の段を纏める役割を果たしている。言ってみれば、この四種の段は起・承・轉・結に類似しており、詩を解釋する上で分かり易くするために用いた手法であつたと思われる。

四種の段は、元の范德機撰『木天禁語』に、「五言長古篇法」の「分段・過脈・回照・贊歎」として解説されている。

首段是序子、序了一篇之意、皆含在中。(中略)次要過句、過句名爲血脈、引過次段。過處用兩句、一結上、一生下、爲最難、非老手未易了也。回照謂十步一回頭、要照題目、五步一消息、要閉語。讚歎方不甚迫促。長篇怕雜亂、一意爲一段。以上四法、備北征詩、舉一隅之道也。

首段は是れ序子にして、一篇の意を序し了り、皆含みて中に在り。(中略)次いで過句を要し、過句は名づけて血脈と爲し、次段を引過するなり。過る處は兩句を用ひ、一は上を結び、一は下を生じ、最も難しと爲し、老手に非ざれば未だ了り易からざるなり。回照は十歩にして一たび回頭し、題目を照らすを要し、五歩にして一たび消息し、閉語を要するを謂ふ。讚歎は方めて甚だしくは迫促ならず。長篇は雜亂を恐れ、一意もて一段と爲す。以上の四法は、「北征」詩に備はり、一隅を擧ぐるの道なり。

元代においては、段に分けて解釋することが流行していたようであ

る。心華元棟は『木天禁語』の段分けの手法を分かり易く解説し、更に代表例として示される「北征」詩に當てはめたと想像される。

こうした段分けは、當代にあつて斬新な手法であつたようである。「奉送郭中丞兼太僕卿充隨右節度使三十韻」(『續翠抄』卷三)に次のように言う。

南度趙次公、又元朝之論解杜詩、有分段過段回照贊歎、故不可無科段。

南度の趙次公、又元朝の杜詩を論解するに、分段・過段・回照・贊歎有り、故に科段無かるべからず。

また「奉贈李八丈判官」(『杜詩抄』卷二十)では、次のように言う。

元朝カラ分段過段回照讚段ノ者アル。揭曼碩爲之。宋朝未定段、故違事多乎。

元朝から分段・過段・回照・讚段の者ある。揭曼碩は之を爲す。宋朝は未だ段を定めず、故に事に違ふこと多きか。

これら二例によると、宋代でも趙次公が段を分けていたが、まだ手法が明確には整っておらず、誤りも多かったようである。それが元代に入ると、揭曼碩が四種の段分けを用い始め、その手法が確立したようである。心華も註解するに及び、いち早く中國に目を向け、最新の手法を採用したのである。

では心華が段分けをすることに對し、江西龍派と雪嶺永瑾ほどのように評しているのだろうか。「奉贈李八丈判官」(『杜詩抄』卷二十)で、江西の評を載せる。

今此六段ハ心華說也。見物、眼ハ心華奇特也。天下異人也。譬之則心華爲大山、如吾者螭螻也。豨翁舊言也。

今此の六段は心華の説なり。物を見る眼は心華奇特なり。天下の

異人なり。之を譬ふれば則ち心華は大山爲りて、吾の如きは螭螻なり。豨翁の舊言なり。

「豨翁」は江西龍派のことであり、心華を大山に、自身をオケラに譬える程、心華の物を見る眼、ここでは段分けをする觀察眼の鋭さに對して敬意を表している。

しかし一方で江西は、「投贈哥舒開府二十韻」(『續翠抄』卷二)で次のように評する。

江西云、(中略)第三番今世間充滿者、整書是也。其科無盡而如蛛網、見之則目可眩矣。頗似失詩意焉。

江西云ふ、(中略)第三番は今の世間に充滿する者にして、整書は是なり。其の科無盡にして蛛網の如く、之を見れば則ち目眩むべし。頗る詩意を失ふに似たり、と。

ここで江西は、第三段階の『心華臆斷』が限り無く段を分け、蜘蛛の網が何物をもひっくるめるように細かに分けているのを見ると、目が眩みそうである。頗る詩意を失うようだ」と批判している。江西は、心華が細かに段分けすることに對し、「夔府詠懷」(『續翠抄』卷十四)でも「心華臆斷如蛛絲申之マキシウス」(『心華臆斷』は蛛絲の如く之を申さばまきしうす)と、同じ表現を用いて批判している。細かに段分けをする具體例は、「錦樹行」(『續翠抄』卷十八)を始め、多くの詩に認められる。江西は、『心華臆斷』の觀察眼を評價しながらも、詩によって適宜對應すべきであると説いている。

次いで後期の『杜詩抄』の講義者雪嶺永瑾は、「千秋節有感二首」(『杜詩抄』卷二十)で、「心花臆斷二ハ蛙ノ家ノコトク科ヲツリ置カラル。」と評している。つまり『心華臆斷』は、蛙の居場所が何處でも家になるように、何かと段を分けている、と表現を變えて江西と同じ

批判をしている。「心華臆斷」は、細かに段を分けて分かり易く解釋しようとしたが、それは却って後の禪僧にとっては煩雜であり、非難の對象にもなったようである。

(2) 詩、聯、詩句、字についての考察

『續翠抄』は「心華臆斷」の註解を要約して引用するのに對し、『杜詩抄』は註解全文を引用する場合が多い。『杜詩抄』の引用箇所を分析すると、『心華臆斷』は詩と詩、聯と聯、詩句と詩句、といった構造分析を重要視していることに氣付く。例えば「遺興五首」(『杜詩抄』卷五)には次のようにある。

斤云、此五首前後意思、不在次第之例、或次第、或不次第。又全進之變例也。

斤云ふ、此の五首の前後の意思は、次第の例に在らず、或いは次第にして、或いは次第ならず。又全進の變例なり、と。

『心華臆斷』は五首の關係について、配列の順序通りに意味が通じる詩と、通じない詩があると、連作五首における詩と詩の關係を分析している。ここで實際に第一首の註解を見る前に本文を挙げる。

- 1 蟄龍三冬臥、 2 老鶴萬里心。
 - 3 昔時賢俊人、 4 未遇猶視今。
 - 5 嵇康不得死、 6 孔明有知音。
 - 7 又如壠坻松、 8 用舍在所尋。
 - 9 大哉霜雪幹、 10 歲久爲枯林。
- 蟄龍は三冬に臥す、老鶴は萬里の心。昔時賢俊の人、未だ遇はざるに猶ほ今を視るがごとし。嵇康は死を得ず、孔明は知音有り。又壠坻の松の如し、用舍は尋ぬる所に在り。大なる哉、霜雪の幹、歲

久しくして枯林と爲る。

『心華臆斷』は、まず第一聯に對して「斤云、與也。上句豎也。獨善之地。下句横也。兼善之期也。未過之情狀也。」(斤云ふ、與なり。上句は豎なり。獨善の地なり。下句は横なり。兼善の期なり。未だ過ぎざるの情狀なり、と。)とする。「豎」とは構造上、第一句の意が第二句に繋がることを意味し、「横」とは第二句の意が順序通り第三句に繋げられないことを意味する。心華は第一句と第二句を、獨善の地でじっとして、兼善を願うも未だ果たせない状態であると解している。第二聯には、「斤云、言古賢俊、猶今賢俊也。隱然有境松枯林之氣象也。」(斤云ふ、言は古の賢俊も、猶ほ今の賢俊のごときなり。隱然として境松枯林の氣象有るなり、と。)と、古の賢者は没していようと、今の賢者のようであったであろうと解釋し、どことなく第七句の「境松」と第十句の「枯林」に、その趣きが表れているとする。第三聯には、「斤云、與也。上句始終皆舍、下句始舍終用。乃此一聯巧在中間、結前二聯、生後二聯。」(斤云ふ、與なり。上句は始終皆舍てられ、下句は始め舍てらるるも終に用ひらる。乃ち此の一聯の巧は中間に在りて、前の二聯を結び、後の二聯を生ず、と。)とある。第五句が嵇康の不遇、第六句が孔明の好遇と、意味上對比していることを指摘し、全體の中でこの一聯は前後の聯を繋ぐ役割を果たしているとする。第五聯には、「斤云、反覆尋之。孰用孰舍。顧此霜雪強幹、千載枯林耳。(中略)語意如無歸而甚有焉。文章之妙也。」(斤云ふ、反覆して之を尋ぬ。孰か用ひて孰か捨てん。此の霜雪の強幹、千載の枯林を顧みるのみ。(中略)語意は歸する无けれども甚だ有るが如し。文章の妙なり、と。)と、自らの將來を問うも、誰が用いてくれるか當てもなく、「霜雪の幹」と「故林」を顧みるだけである。しかし、語

意には官に就かないとあるのに、いまだに官に就く意が存するようだとしている。

このように『心華臆斷』は、詩句の解釋は勿論、詩と詩、聯と聯、詩句と詩句、語意と語意といった、構造面から指摘することが多い。心華がなぜ構造面を重要視したかと言へば、段分けと同様、元代の詩話の影響が存すると思われる。心華の注釋方法は、元代中期の詩話『詩法源流』の「詩格」において、杜詩に施された註解と類似している。例えば「句應句格」に代表される「登高」詩には、第一聯「風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛廻。」（風急に天高くして猿の嘯くこと哀し、渚清く沙白くして鳥飛廻す。）に、次のようにある。

此上句起第二聯上句、言山中所見景物。下句起二聯下句、言江中所見景物。

此の上の句は第二聯の上の句を起し、山中に見る所の景物を言ふなり。下の句は二聯の下の句を起し、江中に見る所の景物を言ふなり。註者は『心華臆斷』と同様に、一聯を上句と下句に分け、二句の意味上の對應、前後の聯との繋がりを考察している。このように「詩格」では、選擇した杜詩について、構造上の分析を施している。元代に編まれた『詩法源流』『木天禁語』等の詩話は、何れも詩法、句法、字法に重點を置いている。元代の構造を重視する傾向が日本へも傳承し、心華もそれに倣ったのであろう。

『心華臆斷』が重視した構造分析の註解に對して、後期の雪嶺永瑣は「北征」(『杜詩抄』卷三)で次のように評する。

心華評、只評文法、不及作者之心、不足也。故北征一篇有喜意愧意也。

心華の評は、只だ文法を評するのみにして、作者の心に及ばず、不

足なり。故より北征の一篇には喜意愧意有るなり。

雪嶺は、『心華臆斷』が文法を評するに止まり、作者の心に觸れないため、解釋として不足していると批判する。ただし、雪嶺は『杜詩抄』に『心華臆斷』の構造上の註解を引用しており、幾らかその必要性を認めていたようである。その點、江西に至っては、殆どその構造上の註解を引用していない。この面での江西の評價は高くないようである。

(3) 典故の引用

心華元棟は博識で高名を得ており、それは杜詩の註解においても、典故表現を分析することで遺憾なく發揮されている。「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」(『續翠抄』卷三)には、次のようにある。

江西云、心華臆斷、此詩譽孔巢父、而刺李白爲永王璘幕官。

此時白已爲永王被官乎。唐書宜引考之、心華又若不引考、不有此說矣。

江西云ふ、『心華臆斷』は、此の詩孔巢父を譽め、而して李白の永王璘の幕官と爲るを刺る。此の時白は已に永王の爲に官せらるるか。『唐書』宜しく引きて之を考ふるべきにして、『心華』又若し引きて考へざれば、此の説有らざるなり、と。

江西龍派は、『心華臆斷』が『唐書』を引用していなければ、孔巢父を譽め、李白が永王璘の幕官となったことを譏る、と言う解釋は成立しなかったらうと譽めている。心華が史書に詳しかったことは、義堂周信も指摘している。「收京其三」(『續翠抄』卷三)の「雜虜橫戈數」(雜虜戈を横たふこと數々なり)句に對する注解にも次のようである。

横レ戈トハ止兵之意也。所以者何。魏曹操、楯鼻磨墨、横戈賦詩。是則止戈而無事爲無爲意也。戰國策、衛燭過、免胄横戈而進。心華本引之。

戈を横たふとは兵を止むるの意なり。所以は何ぞや。魏の曹操の、楯鼻に墨を磨り、戈を横たへ詩を賦す。是れ則ち戈を止めて事無く無爲を爲す意なり。『戰國策』に、衛の燭過ぎ、胄を免ぎ戈を横たへて進む、と。『心華』本より之を引く。

心華は「横戈」の典據が、魏の曹操の逸話と『戰國策』であると指摘している。曹操の逸話の典據は、赤壁の戰に際し、「槩を横たへ詩を賦し」たことである。『戰國策』の典據は、現行の『戰國策』には載っていないが、『文選』卷二十八、陸士衡「從軍行」の李善注に「戰國策曰、行人燭過、免胄横戈而進。」(『戰國策』に曰く、行人の燭過ぎ、胄を免ぎ戈を横たへて進む、と。)とある。何れも宋代の諸集注本には載っていない典據であり、心華の博識ぶりが窺える。

江西は「奉寄河南韋尹丈人」(『續翠抄』卷二)に、「心華臆斷博學、至異端書也。」(『心華臆斷』の博學は、異端の書にまで至るなり。)と、心華の博識を認めている。しかし一方で、「八月十五夜月二首其一」(『續翠抄』卷十二)の「歸心折大刀」(歸心大刀を折る)の心華注に次のように言う。

心華臆斷引易、其臭如蘭、其利如金。餘二深見テフカ。入ラス。不可也。

『心華臆斷』は『易』を引き、其の臭は蘭の如く、其の利は金の如し、と。餘に深く見てふか。入らず。不可なり。

心華が『易』繫辭傳上に「二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭。」(二人心を同じくすれば、其の利金を斷つがごとし。心を同じ

杜詩注釋書『心華臆斷』について

くするの言は、其の臭蘭の如し。)とあるのを杜詩に適用させるのに對し、江西は餘りに深読みし過ぎていると批判している。また「戲作花卿歌」(『續翠抄』卷七)の「子章鬪血模糊、手提擲還崔大夫。」(子章の鬪體血模糊たり、手づから提げ擲還す崔大夫。)詩句にも次のように言う。

心華之點、此句作、手提擲還崔大夫。提擲漢書辭故也。江西云、語不合。詩ハ詩、文ハ文而已。何兼之耶。捨心華癖如此。

心華の點は、此の句は、手に提擲して崔大夫に還す、と作す。提擲は『漢書』の辭なるが故なり。江西云ふ、語合はざるなり。詩は詩、文は文のみ。何ぞ之を兼ねんや。捨じて『心華』の癖此の如し、と。

『心華臆斷』では『漢書』にある辭を詩句に無理に適用させ、「手に提擲して崔大夫に還す」と一字二字四字の語調で讀んでおり、それに對して江西は、七言詩句を讀む際の、二字二字三字の語調に一致していないことを指摘する。そして詩は詩、文は文である。詩と文を混同してはならないと『心華臆斷』の癖を批判している。心華が詩の解釋に頓着せず、思い付いた典據を、語句の調子を無視し、無理に杜詩に當てはめたことが非難されている。博識も時と場合によることが分かる。詩の構造に詳しい『心華臆斷』が、一方で典據にも詳しいのは、やはり心華が宋代の注釋書を意識していたのが原因であろう。『分類本』『草堂本』『批點本』は、全て典據に詳しく、宋代集注本の特徴とも言える。心華は、元代は勿論、宋代の注釋法も兼ね備えた註解を残そうとしたのではあるまいか。

(4) 憶測による解釋

『心華臆斷』は、謙遜して「臆斷」とするが、文字通り憶測して解

釋することも多かつたようである。ここでは、心華の憶測の例と、それに對する後世の評も見てみる。「赤谷西庵人家」(『續翠抄』卷五)の「溪回日氣暖、徑轉山田熟。」(溪回りて日氣暖かに、徑轉じて山田熟す。)詩句に次のようにある。

言見徑之前後左右、無非田云々。心華臆斷溪廻、故逕轉。西收之後、東作之先云々。使逕迂曲云々。非也。凡心華穿鑿、義說如此。非解^{スル}詩之注多矣。此亦其一等也。畢竟非也。凡逕邊之田必良而熟。熟者能得秋也。日炁晴處^ル山田熟スル意也。

言は徑の前後左右を見れば、田に非ざる無し云々。『心華臆斷』に溪廻り、故に逕轉ず。西は收むるの後にして、東は作るの先にして云々。逕をして迂曲せしむ云々、と。非なり。凡そ心華の穿鑿の義說此の如し。詩を解するの注に非ざること多し。此れも亦其の一等なり。畢竟非なり。凡そ逕邊の田必ず良くして熟す。熟する者能く秋を得るなり。日炁晴るる處に山田熟するの意なり。

(*左の誤りか。)

江西龍派は、周圍には田圃しかなく、詩意は山田が秋になり良く實っていると言ふことなのに、『心華臆斷』が、谷が屈曲して流れるので、谷沿いの小徑もうねり續くとか、西では刈り入れの後、東では耕す前云々とか、道を曲がらせる云々とか解するのは誤りであると、紹介するに耐えない註解と考えたためか、簡略化して引用した上で批判する。更に、『心華臆斷』の無理にこじつけた解釋は以上の如くであり、詩を解釋する注ではないことが多い、とまで斷言している。江西は餘程『心華臆斷』の憶測を嫌惡していたらしく、『歸燕』(『續翠抄』卷五)でも「臆斷如トモ蛛網、大概大意ヲ舉耳。」(臆斷するに蛛網の如くとも、大概大意を舉ぐるのみ。)と、「秦州見敎目薛三瓊授司議郎」

『續翠抄』卷六)でも「心華之蛛網ノ如ニ臆斷ヲセラルレトモ無用也。」と、「贈韋左丞丈濟」(『續翠抄』卷二)でも「江西云、此心華說、アマリニイリホカナリ。」と、蜘蛛の網が何でも引つ掛けるように、多くの關連事項よりこじつけ推測することに對し、餘りに複雑で理解できないと批判している。

また雪嶺永璫も、『杜詩抄』卷一「同李太守、登歷下古城員外新亭」の詩句「不阻蓬華興、得兼梁甫吟。」(蓬華の興を阻てず、梁甫の吟を兼ねることを得たり。)に次のように言う。

杜ハ自ラ稷契ニ比スルホトニ、志在孔明之上也。去ホトニ今此宴席テ、歌ヘトアル程ニ、梁一ヲ今歌フハ有深意。只隱居ノ心ハカリニ取テハ、ウタテイト臆一ニ評也。梁甫雖在蓬華、而有相君之志。蓋臆一義、穿鑿傳會也。

杜は自ら稷契に比するほどに、志は孔明の上^ニに在り。去るほどに今此の宴席で、歌へとある程に、梁一を今歌ふは、深意有り。只だ隱居の心ばかりに取ては、うたていと『臆一』に評するなり。梁甫は蓬華に在りと雖も、而れども相君の志有るなり、と。蓋し『臆一』の義は、穿鑿傳會なり。

『心華臆斷』は、杜甫の天子を助ける志が孔明より優れている。杜甫が宴席で歸りに際に歌を強要され、梁甫の吟を歌うのは、深意があるのである。ただ隱居の意味ばかりに取るのは氣の毒であると評している。しかし、雪嶺は梁甫の吟を歌うことは、宴會での謙遜の辭であると解しており、貧者であろうと天子を助ける志があるとすると『心華臆斷』の解釋は穿鑿傳會、即ち無理にこじつけ過ぎると批判している。ただし、『續翠抄』『杜詩抄』共に、『心華臆斷』の註解を引用する場合もあるため、心華の憶測も、考察の對象にはなっている。ただ右の

例の如く度が過ぎると、非難の對象になるのである。

以上、『續翠抄』と『杜詩抄』は、『心華臆斷』の特徴として、段分けを施す點、詩の構造に詳しい點、典據に詳しい點、憶測して解釋する點等に着目している。江西や雪嶺は、心華が段分けをする觀察眼の鋭さや博識である點を高く評價し、また推測した解釋を引用する場合もある。しかし二人は、大凡心華が段分けを細分化し過ぎたり、構造に氣を取られ過ぎたり、思い付いた典據を挙げ過ぎたり、考證事項を無理にこじつけて解釋したりと、程度の過ぎる場合が多いため、それらについて非難する傾向が強い。心華の長所が解釋と上手くかみ合っていないかつたようである。

六、總合的評價

——その原因について——

『續翠抄』の講義者江西龍派は、「上兜率寺」(『續翠抄』卷九)で、「心華——コトコトシサウナ注アリ。孰モ無益、不必偏誤也。」(『心華——』)と、こゝとしそうな注あり。孰れも無益なるも、必ずしも偏誤ならざるなり。)と言ひ、『心華臆斷』の仰々しい注を見て、何れも無益であるが、全てが誤りというわけではないと評している。また「遊龍門奉先寺」(『續翠抄』卷二)で、詩句の註解をする前の總論に「心華臆斷雖可、而又謬往々有焉。」(『心華臆斷』可と雖も、而れども又謬り往々に有り。)と、『心華臆斷』を高く評價していない。江西は、『心華臆斷』を固より輕視する傾向が強いが、それはなぜであらうか。

「奉陪鄭駙馬章曲二首其一」(『續翠抄』卷四)で、江西龍派は、『心華臆斷』の注を批判する理由を次のように言う。

唐人眞實相傳、義理コソ面白ケレ。日本ハ何トストレトモハタケ水

杜詩注釋書『心華臆斷』について

蓮ヲ。謂心華等也。太白傳勝定、勝定傳季潭也。

唐人は眞實相傳の義理こそ面白けれ。日本は何とすれどもはたけに水蓮なり。心華等を謂ふなり。太白は勝定より傳へられ、勝定は季潭より傳へらる。

江西は、中國人が眞實を傳える義理こそが面白いとし、日本人がどんなに注を施しても畑で水泳の術(水蓮)は水練のこと)を練習するように、空理空論に過ぎないと批判し、その代表として心華元棣を擧げる。そして江西自身も日本人ではあるが、杜詩解釋を傳承した太白眞玄は絶海中津に傳えられ、絶海は中國僧の季潭宗泐に傳えられたことに言及し、自身は中國人より間接的に「義理」を傳えられているとする。中國本土・中國人より杜詩學を繼承する意義を強調しているようである。

また「投贈哥舒開府二十韻」(『續翠抄』卷二)では次のように言う。

江西云、(中略)其科無盡而如蛛網、見之則目可眩矣。頗似失詩意焉。況心華非詩僧。彼品評不可信也。若是唐人如此評、則可也。或勝定國師、慈氏和尚等爲之又可乎。蓋詩人之由也。雙桂亦甚嫌其臆斷也。(中略)而後調太白。太白說毀心華之解、故請得聞太白之說也。

江西云ふ、(中略)其の科無盡にして蛛網の如く、之を見れば則ち目眩むべし。頗る詩意を失ふに似たり。況んや心華は詩僧に非ず。彼の品評信ずべからざるなり。若し是れ唐人此の如く評せば、則ち可なり。或いは勝定國師、慈氏和尚等之を爲すは又可なり。蓋し詩人の由なり。雙桂も亦甚だ其の臆斷を嫌ふなり。(中略)而る後太白に調す。太白説きて心華の解を毀り、故に請ひて太白の説を聞くを得るなり、と。

江西は『心華臆斷』の段分けが細かすぎるのを批判した後、まして心華は詩人ではないのだから、彼の品評は信ずべきではないとする。もし中國人がこのように評したり、或いは絶海中津(勝定國師)や義堂周信(慈氏和尚)が評するのなら好い理由は、それは彼らが詩人だからであるとす。次いで惟肖得巖(雙桂)や太白貞玄も『心華臆斷』の註解を批判したことを擧げている。

詩人と非詩人の違いは何であろうか。江西は「贈韋左丞丈濟」(續翠抄)卷二で、心華の詩に對して次のように言う。

江西云、此心華說、アマリニイリホカナリ。總心華詩文共醇厚。況於講說乎。其支證ハ、心華詩、一身處々雲無帶、雙鬢年年雪有莖。雪有莖語不如雪千莖ノ平穩語也。

江西云ふ、此の心華の説は、あまりにいりほがなり。總じて心華の詩文は共に醇厚なり。況んや講說に於いてをや。其の支證は、心華の詩に、「一身處々雲無帶、雙鬢年年雪の莖有るがごとし」と。

「雪有莖」の語は「雪千莖」の平穩の語に如かざるなり、と。江西は、心華の詩句の註解が表現に癡っていて分からぬとし、總じて心華の詩文も複雑で癡りすぎ、講說においては尙更であるとす。その例證として、心華の詩句「雪の莖有るがごとし」は癡りすぎており、結局、白居易の「江州赴忠州至江陵」詩の「雪千莖のごとし」とある平穩な語句に及ばぬとする。このように、中國人や詩人が詩心を理解しているのに對し、心華は詩文の字面に氣をとられ、詩心を會得できていないために、非詩人と見なされたと思われる。禪林では宗旨第一であり、字面に執着することは、本末轉倒として、非難されていたことが起因していよう。

心華は、元詩話より影響を受けてはいるが、江西としては、心華が

日本に止まり、來日僧や渡元(明)僧の影響を直接に受けることが少なく、中國の杜詩學を繼承していない上、杜詩の字面にばかり執着していたという理由で、『心華臆斷』を批判したのであろう。

中期の著名な詩僧が『心華臆斷』を批判し、後期の雪嶺永瑾も非難している。それにも関わらず、從來の指摘の如く、『心華臆斷』は禪林後期において流布している。時代が下るにつれ、禪林の詩文觀も變化し、「詩禪一致」の思想が生じ、禪僧は益々詩作に執着するようになる。そのため宗旨を尊ばず、詩の表現に癡る禪僧は、『心華臆斷』のような、詩の構造分析に詳しい注釋書を重寶視したのではあるまいか。時期によって『心華臆斷』への接し方も變化しているように思われる。

七、禪林杜詩學の風潮について

心華元棟が宋・元の杜詩研究の方法に影響を受けていることは既に述べた。心華は宋代の三種の杜詩注釋書を参照しており、これらに影響を受けたことは容易に推測できる。この點、宗旨重視の傾向が強い當時にあって、しかも、元代と同時期に相當する日本の南北朝期に、元の藝術構造重視の研究法を、心華が早くも察知・實踐し得たのはなぜであろうか。例えば五山版『詩法源流』に春屋妙葩が序を付していることから、南北朝期に元代の詩話が流入していたのも確實である。が、次の『木天禁語』「氣象」の記事に注目したい。

又詩之氣象、猶字畫然。長短肥瘦、清濁雅俗、皆在人性中流出。得八法便成妙染、而洗吾舊態也。此趙松雪翁與中峰和尚述者、道良之語也。漫錄於此耳。

又詩の氣象は、猶ほ字畫のごとく然り。長短肥瘦、清濁雅俗、皆人

性の中に在りて流出す。八法を得て便ち妙を成して染り、而して吾が舊態を洗ふなり。此れ趙松雪翁と中峰和尚との述ぶる者にして、道良の語なり。漫りに此に録するのみ。

「中峰和尚」とは、中峰明本（二二六三〜一三三三）のことである。中峰は中國僧であり、日本の禪僧も多く彼より法を嗣いでいる。當代にあって中國へ渡った禪僧は、大凡中峰の下に參じたと言つても過言ではないとされる。

中峰は、『宋元學案』の傳によると、彼が『廣錄』三十卷を佛藏に收めるに際しては、段分けの祖と言われる揭曼碩が序を付している。中峰の銘は『杜律虞註』で有名な虞集が記している。また中峰と趙孟頫（趙松雪翁）が唱和した梅詩は有名であり、范德機も中峰より「氣象」の説を聞いてゐる。このように元代を代表する文人は殆ど中峰と交遊している。元詩話でも杜詩は最高の詩と評されており、中峰は杜詩學について、最先端の研究情報を熟知していたと思われる。

元代の杜詩研究の風潮は、前述の如く、宋代の典據重視から、詩の藝術構造・格律・法則性重視へ移行したと言われている。中峰はこの研究の最先端で活躍しており、中國に渡ってきた日本の禪僧にそれらの知識をも傳授したのではあるまいか。やがて最先端の知識を持ったこれら禪僧が日本に戻ってくると、彼らはその知識を披露し、それにつれて元詩話も浸透したと考えることはできないか。

こうして元の詩學が浸透したため、一方では江西が、心華に對して、中國（僧）の影響が少なく、杜詩學を繼承していないと指摘するが、心華も自ずと藝術構造の分析といった元代の研究法に目を向けていたのであろう。南北朝期、禪僧の往來や詩話の傳來によって、既に元代の詩學研究法が日本にもたらされ、これを受容する風潮が存した

のであろう。

八、まとめ

元の詩學研究法をいち早く吸収した心華元棟は、今度はそれを元詩話の中でも最高の詩人と評される杜甫の全詩に當てはめ、しかもそこに宋代の典據中心の註解を加味し、日本禪林に浸透させようとしたのであろう。まさに『心華臆斷』は、それまでの杜詩注釋書の集大成と言えよう。日本禪僧に理解できるように、そして中國諸注釋書に匹敵するように、自らの持てる知識全てを注ぎ込み、何度も何度も納得いくまで書き直した心華の姿が目に見えぬ。その旺盛な意欲によって、却つて典據・構造・文法・憶測が詳しくなり過ぎ、膨大な勞力とは裏腹に難解な注釋書として後世酷評されることになるのである。結局、心華が納得いく『心華臆斷』は、五卷までしか完成することができなかった。それまで反故の裏などに書き直した草稿は、大陽□伊にのみ傳わり、世に知られなかつた。しかし、その草稿は大陽から江西に傳わり、江西が講義することで『續翠抄』の中にも残された。次いで後期禪僧へ草稿も含めた『心華臆斷』が引き繼がれ、『杜詩抄』にも書き残されたのであろう。

管見に入る限りでは、『心華臆斷』は禪林初出の杜詩注釋書であると同時に、日本初出の杜詩注釋書ではないかと思われる。残念ながら現在散佚しているが、心華元棟が全身全靈を込めた結晶であり、宋・元の註解法を兼備した最新の杜詩注釋書であつたのであろう。禪林杜詩隆盛を示す貴重な存在と言えらる。

註

- (1) 芳賀幸四郎著『中世禪林の學問および文學に關する研究』(日本學術振興會 昭和三十一年)に既に指摘されている。
- (2) 柳田征司著『室町時代語としての抄物の研究』(上册)(武藏野書院 一九九八年十月)における定義に従う。
- (3) 拙稿「日本禪林における杜詩解釋——岳陽樓に登る」詩について——『山本昭教授退休記念中國學論集』所收 白帝社 二〇〇〇年三月
- (4) 『杜詩續翠抄』に關しては、『續抄物資料集成』第一卷、第三卷(清文堂 昭和五十五年)がある。『杜詩抄』に關しては、足利本『杜詩抄』全十一卷(光風社書店)・兩足院所藏全二十四卷がある。高見三郎「杜詩の抄——杜詩續翠抄と杜詩抄——」(『山邊道』第二十一號)に詳しい。
- (5) 玉村竹二著『五山禪僧傳記集成』(講談社 昭和五十八年)參照
- (6) 『空華集』卷五「寄聖壽心華次韻」
- (7) 『峨眉鴉臭集』「次心華上人韻呈道元首座」
- (8) 『空華日用工夫略集』康曆二年六月十日條
- (9) 『臥雲日件錄拔尤』享德二年十月二十五日條
- (10) 『臥雲日件錄拔尤』享德二年十月二十五日條
- (11) 應安三年四月二十日條、應安五年七月三日條(『空華日用工夫略集』)
- (12) 拙稿「日本禪林における杜詩受容——初期における杜詩の應用と流布——」(『中國學研究論集』第八號 二〇〇一年十二月)
- (13) 註①の芳賀幸四郎氏の著に指摘されている。
- (14) 前掲④高見氏の論文に詳しい。
- (15) 卷十二「荊南兵馬使太常卿趙公大食刀歌」
- (16) 前掲④高見氏の論文に、江西が大陽に杜詩講義を受けたことが指摘されている。
- (17) 高見三郎「杜詩續翠抄」の諸層——中國側杜詩注釋書を中心に——(『國語國文』第五四卷第一二號)に詳しい。
- (18) 土岐善磨「心華臆斷と愚得」(『杜詩抄解題』七 光風社書店)に指摘されている。
- (19) 大山深「詩法源流」偽書說新考(『日本中國學會報』第五十一集)に『詩法源流』と「詩格」の成立過程が詳しい。
- (20) 『空華集』卷十三「贈諒上人詩卷序」に「今聖壽心華律師、僧中童狐也」とある。
- (21) 楊載「詩法家數」(「總論」)に「老杜全集、詩之大成也。」とある。
- (22) 許總「金元杜詩學探析」(『杜詩學發微』内編所收)に詳しい。